

第8回例会【歴史研究と環境問題史 ——ドイツ近代都市研究を例に——】

12/9(木)開催

報告者:穂鷹知美氏

コメンテーター:村松弘一氏

《報告要旨》

1999年度第八回例会「歴史研究と環境問題」

D4 穂

鷹知美

環境に関わる研究が活発になってきている一方、環境問題は現代的な問題であり、歴史的な経緯があることが軽視される傾向が長くあった。しかし最近、歴史研究でも新たな動きが現れてきた。

歴史研究のなかで環境に関わるテーマがどのように扱われるのかを、ドイツにおける近年の動向から概観した。環境をテーマとした歴史研究は、伝統的に二つの流れがあった。まず技術史のなかの、技術発達の一つの結果としての環境破壊や公害としての研究。二つ目は、地理学と融合した、社会の一構成要素としての自然環境や気候などの研究である。

ただし、技術や自然科学的な側面の強く出された環境史は、ドイツ歴史学の中で垂流とみなされる傾向も根強かった。しかし、1980年代からドイツで歴史学においても環境研究が活発になってくる。例えば、社会衛生論の一端として環境についての研究も、社会史のテーマとして扱われるようになる。さらに、人間と環境の関係そのものが研究の対象として注目される。ここでは自然対人間、また文化対自然という対立的な理解ではなくなり、文化のような自然と人間を結びつける媒体の意味が重要視される。

しかし環境史発達の経緯に表れているように、環境の歴史的研究は様々な研究分野にまたがっており、歴史学に留まらない共同研究が今後も重要であろう。また、環境を扱う立場、叙述のスタンスも多様である。従来の人間中心的な学問体系への批判から自然の視点から歴史を叙述しようとする姿勢をもつ人がいるのも、環境史の特徴である。

最後に、東洋古代史の村松氏が中国古代史の環境研究について紹介して下さった。時代と場所が異なるため、研究事情が非常に異なることが判明したが、どのような共通のテーマ性や比較の視点を見いだし、情報交換の場をつくってゆけるかを今後の課題にしたい。